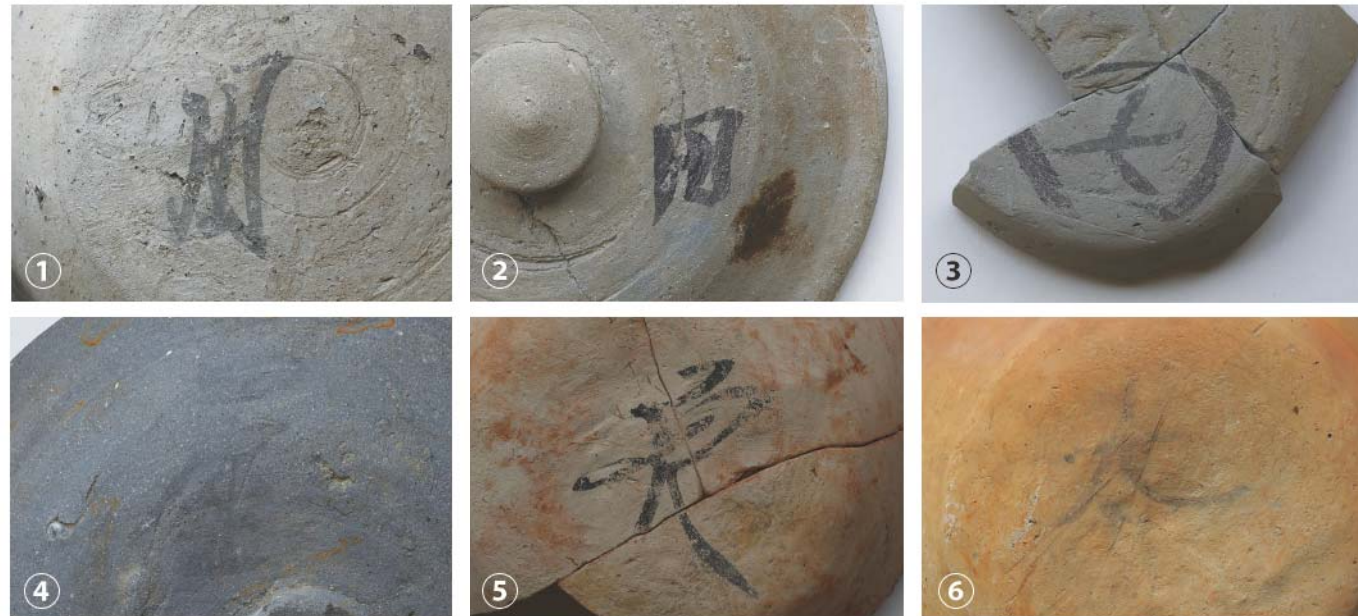




- 【墨書土器】
写真①～③:「田」 写真④:「田屋」
写真⑤:「夜」 写真⑥:「太」
- 【人形代/舟形代】
写真⑦:調査区①-5 川S1出土人形代
写真⑧: (左)調査区①-3 溝S2出土舟形代 (37cm)
(右)調査区②-3.4 溝S2出土舟形代 (23cm)
- 【管玉】
写真⑨ (左)調査区②-7.8 溝S36出土
(中)調査区②-7.8 溝S8出土
(右)調査区①-2 川S1出土

■灌漑用の川と溝

調査地の東側でみつかった川S1(調査区①-2～6)は、古墳時代の後期から平安時代にかけて、長い間流れ、使われ続けていたことが分かりました。特に調査区①-5で検出された地点では、大量の土器が出土しており、墨で文字が書かれた土器が多く見つっています。その内容は判読できないものもありますが、「田」「田屋」など水田耕作にかかわる文字が目立つのが特徴です。その他にも人形代が複数点みつっています。残りの良いものは、墨で烏帽子や眉、目、鼻、口、髭を表現していました。また、川から分水していたと考えられる溝が複数条がみつっており、その中からは舟形代がみつっています。

調査成果のまとめ

今回の調査では、既往の調査ではわからなかった過去の具体的な土地利用を明らかにできたことが大きな成果と言えます。調査地の東側では、長期にわたって祭祀をおこなっていた川を中心に、護岸や堰を備えた水田耕作ための灌漑用水路が張り巡らされていたことが分かりました。また、県道沿いの地点では、弥生時代末から古墳時代初めの墓域が確認され、隣接して屋内棟持ち柱を持つ掘立柱建物や柵、井戸、溝がみつかりました。

一方で、①祭祀をおこなっていた川周辺では建物等がみつっていないことから、祭祀等の実施主体が過去の県道調査の南側でみつっている集落と関係があるのか、②今回検出された墓域がどの程度広がるのか、③県道調査で部分的に確認されている弥生時代末から古墳時代初めの居住域の範囲はどこまでかなど、いくつかの課題も明らかになりました。これらは今後の調査を通じて明らかにしていく予定です。

かさ はら みなみ

笠原南遺跡発掘調査地元説明会資料

令和7年(2025年)7月26日(土) 守山市教育委員会/公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

笠原南遺跡と調査の概要

■遺跡の概要と既往の調査

笠原南遺跡は滋賀県守山市笠原町に広がる遺跡で、弥生時代から平安時代にかけての集落跡および生産遺跡(水田耕作地帯)として知られています。

本遺跡は、昭和59年度(1984年度)に県道48号(主要地方道路近江八幡守山線)敷設に先立ち試掘調査が実施され、埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が確認されました。その後、昭和61年度(1986年度)にかけて発掘調査が実施されました。調査の結果、調査地の南側の県道11号(主要地方道路守山栗東線ーレインボーライン)に近い地点で奈良時代から平安時代にかけての溝に区画された屋敷跡が、北側の笠原の集落に近い地点からは弥生時代末から古墳時代初頭の集落が見つかりました。特に奈良時代から平安時代の屋敷内の溝や建物を構成する柱穴から銅製鈿帯(ベルトの飾金具)や転用硯(食器を硯に転用した土器)、墨書土器(墨で字が書かれた土器)が出土しています。

■今回の調査の成果の概要

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、守山市土地開発公社からの依頼により産業用地開発に伴う発掘調査を令和6年度(2024年度)から実施しています。

これまでの調査で、主に弥生時代末から古墳時代初めの前方後方形周溝墓をはじめとした周溝墓・溝・川・掘立柱建物や、水田耕作に関連する古墳時代後期から平安時代の溝・川が見つっています。弥生時代末から古墳時代初めの掘立柱建物の柱穴からは銅鏃が、古墳時代後期から平安時代の溝からは墨書土器や人形代、舟形代などがみつっています。



図1 笠原南遺跡(黒枠)と今回の調査地点(赤塗部分)

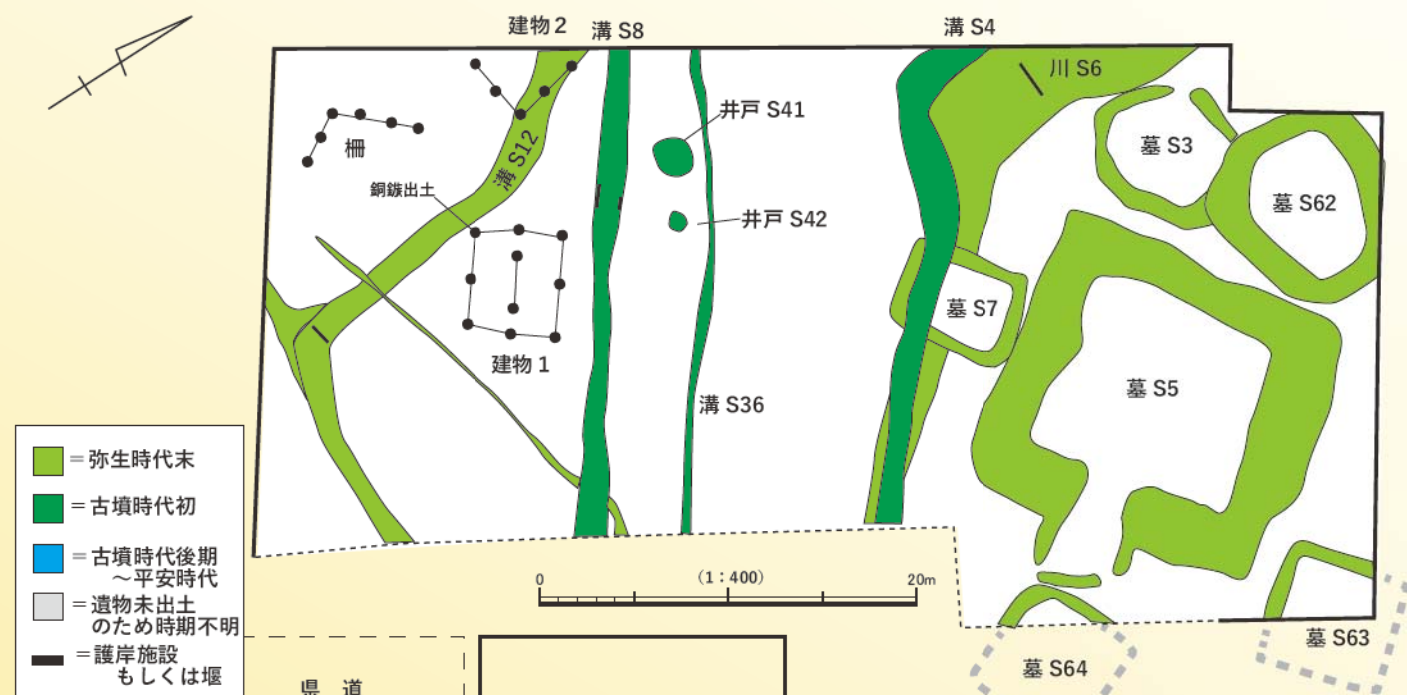


図3 調査区②-7.8 拡大図

今回の調査成果

昨年度から実施している調査では、主な遺構として弥生時代末から古墳時代初め(約1,800年～1,700年前)の周溝墓、溝、川、井戸、掘立柱建物や古墳時代後期(約1,500年～1,400年前)から平安時代(約900年前)に流れていた川等がみつかりました。そして、これらの遺構に伴って、弥生土器や土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、はじきすえきりよくゆうとうき かいゆうとうき 黒色土器といった、多様な土器が出土しています。

■周溝墓

調査区②-7.8の北西端から、全長約19m(周溝含む)の前方後方形の周溝墓を中心に6基の周溝墓がみつかりました。

前方後方形周溝墓は、前方部が長さ6.5m、幅2.5～3mで外側がやや開いています。後方部は一辺約10mを測ります。周溝は幅約2.5m、深さ0.7～0.8m、前方部側は幅0.5m、深さ0.2m程度で、後方部側と比較すると非常に浅くなっています。また、後方部北側の周溝の墳丘寄りから墳丘上に供献されていたと考えられる土器がまとまってみつかりました。それらの土器から弥生時代末頃に造られたことがわかりました。他の周溝

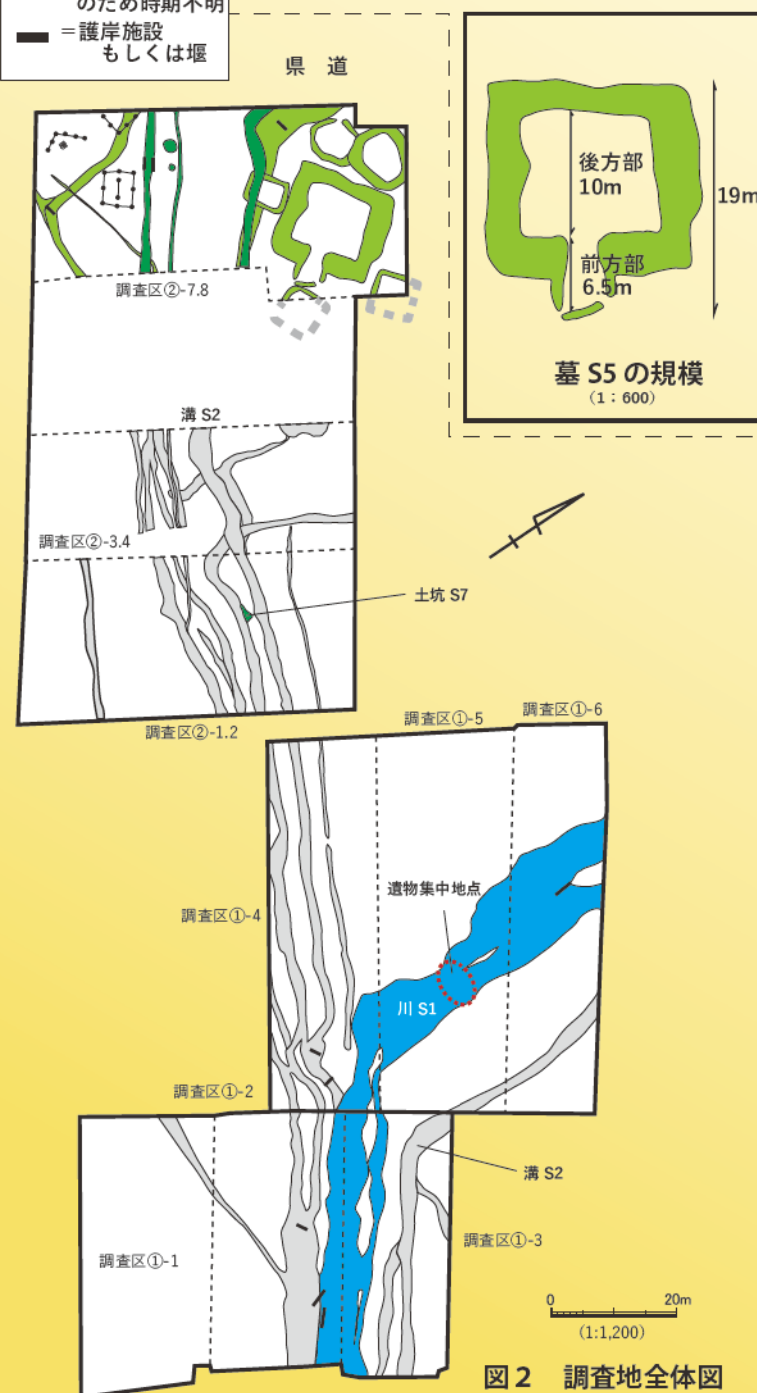


図2 調査地全体図



写真1 調査区②-7.8 全景



墓は、土器が出土していないので正確な時期はわかりませんが、前方後方形周溝墓を中心に密集している状況から同時期に造られた可能性が高いと考えられます。同様の形の周溝墓は、県内では湖南地域を中心に見つかり、弥生時代後期から古墳時代初めの時期に造られていることが分かっています。

■掘立柱建物と井戸

調査区②-7.8の南側からは、掘立柱建物 1 (2間×2間・棟持柱付)の建物がみつかりました。屋内に棟を支える柱を持つ特殊な建物と考えられます。その建物の南西隅の柱穴から銅鏃どうぞくが出土しました。

また、北側で井戸が2基がみつかりました。出土した土器から古墳時代初めの時期と考えられます。

①前方後方形周溝 (S5) 墓遺物出土状況 / ②掘立柱建物 1
③掘立柱建物 1 の柱痕から出土した銅鏃
④掘立柱建物 1 の遺存していた棟持ち柱 / ⑤井戸 S42 の遺物出土状況

